

『世界子どもハイクコンテスト』特別表彰式を開催



JAL SKY MUSEUMを会場に、金賞・銀賞・銅賞の子どもたちを囲んでパチリ。



全ての大賞の中から特別表彰作品を選抜。



初対面でも和気あいあいとハイク作り。



表彰式の参加者をJAL格納庫にご案内。

「あさがおが ぱあつとひらき わらつてる」
 「ガラスごし うなぎが見える おいしいそう」
 ハイクから滲み出る子どもたちの素直な感性に、大人たちも思わずにっこり。日本で生まれた俳句は、「ハイク（三行詩）」として世界に羽ばたき、今やさまざまな言語でも楽しめるようになりました。そのハイクと絵で構成された作品を、日本および全世界に暮らす15歳以下の子どもたちから募集するのが、公益財団法人JAL財団が主催する『世界子どもハイクコンテスト』です。東京オリンピックが開かれた1964年に日本航空が始めたハイクプロジェクトを1990年にJAL財団（当時は日航財団）が引き継ぎ、世界子どもハイクコンテストとして第1回を開催し、現在に至ります。
 第18回大会には47の国と地域から過去最高となる2万1538点の応募があり、日本語大会と各地域大会全体で178の大賞が選ばれました。その中からさらに特別表彰を選定し、受賞者を東京に招待。7月27日、『JAL SKY MUSEUM』に

今回のテーマに該当する目標



第18回 世界子どもハイクコンテスト
 特別表彰作品 / 募集テーマ「かぞく」



弟洗狗狗 共享歡樂泡泡沐 牠是我家人

犬を洗う姉と弟 楽しい泡のお風呂だ 犬も家族
 李予樂 (14歳・高雄)



そぼと見た 考える人 なつの午ご

Granny and I Look up the Thinker Summer afternoon
 塚原帆香 (9歳・天津)

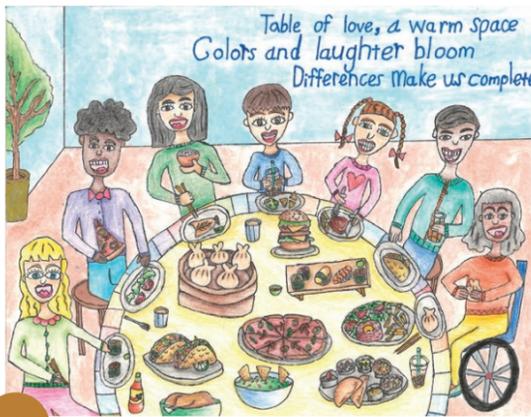


Table of love, a warm space
 Colors and laughter bloom Differences make us complete

愛あふれるテーブル、温かな場所 肌色と笑い声が輝くちがいが私達をひとつにする
 Oliver Millan (10歳・サンフランシスコ)

て表彰式を開催しました。

当日は特別表彰受賞者に加え、日本語大会入賞者、東京の芭蕉記念館で俳句教室に通う子どもたちも来場。表彰式の前に行われたハイク教室では5人ずつのグループでテーブルを囲み「みんなでひとつのハイクを作ろう」という課題に挑戦。参加した子どもたちからは、「それぞれが考えたいところをつなぎあわせると、1人で作るよりも楽しい」「同じグループの人が、日本にはないような視点でハイクを作っていて面白かった」「英語と中国語のハイクが5・7・5ではなかったのにびっくりした」といった感想が寄せられ、ハイクを通じた異文化交流から新たな刺激をもらった様子が窺えます。
 子どもたちの感性を養い、ハイクを生み出した日本文化や現代の日本への理解を深め、相互理解と国際交流を促進することを目的にスタートした世界子どもハイクコンテスト。JAL財団とJALグループは、世界中の子どもたちによるハイク創作の喜びが、これからは国際交流の一助となることを願っています。

「世界子どもハイクコンテスト」特設ページは [こちら](http://www.jal-foundation.or.jp/haiku-contest/)

www.jal-foundation.or.jp/haiku-contest/



2015年9月、全国連加盟国(193カ国)により「持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals: SDGs)」が採択されました。2030年までに、貧困や気候変動、平和的社会などの17の目標を達成すべく、JALグループも社会の課題解決に取り組んでいきます。